

取材先	下関空襲・終戦展実行委員会		
企画名	2020 With corona 第16回下関空襲・終戦展 —下関空襲パネルと戦中戦後の感染症資料展—		
取材日	2020年8月12日(水)天候[晴れ時々雨] [10:00~12:00]	取材地	しものせき市民活動センター

レポート

終戦から75年、感染症とともにあった戦中戦後の暮らしを紹介する「2020 With corona 第16回下関空襲・終戦展—下関空襲パネルと戦中戦後の感染症資料展—」が8月8日から17日の10日間、しものせき市民活動センターで開催されています。

これは、下関空襲・終戦展実行委員会（現在会員10名）が、戦後60年の2005年から毎年夏にテーマを変えながら開く「下関空襲・終戦展」の取り組みで、今回は16回目の開催となりました。

下関空襲で焼け野原になった市街地の写真パネルや、戦中戦後の感染症に関する資料約50点が展示されており、中でも注目すべきは、1941年～1952年の「市報しものせき」の復刻版から感染症に関する記事を抜粋して紹介されているところであり、その市報の復刻版は、郷土史家の故澤 忠宏氏の遺品であるとのことでした。

来場者は、5歳の時にこの空襲に遭い、写真パネルをみて「この通りだった」と鮮明に覚えておられる方や、親子連れ、ご夫婦などさまざまでしたが、井手久美子代表によると、親子連れで来た中学生が、下関空襲を学習課題にしたいと、その場におられた老夫婦に「お話を聞かせてください!」と迫っていったという場面があったそうです。

井手代表に、今回このテーマを選ばれた理由をお聞きしたところ、コロナよりもっと感染症がいろいろあった当時の不衛生な環境の中でも、それを乗り越えてきた下関人の力について学ぶことで、コロナと「正しく向き合う」ことができるのではないかということでした。

また、今回井手代表に、この企画展を通して一番伝えたいことをお聞きしたところ、「つなぐ」ということ、戦争を体験した世代から戦争を知らない子どもたち、更に次世代につなぐただ一つの「楔（くさび）」であるということ力を強く語られました。

「忘れてはいけないことがある。どうしても伝えたいことがある」という本会の理念に、改めて触れることのできた貴重な時間となりました。

状況写真



▲井手代表と桔梗委員



◀市報しものせきの復刻版I・II

市報から抜粋した感染症の記事の一部



▲展示の様子



▲話を聞かせてもらっている中学生(写真提供:井手代表)



▲写真に5歳の記憶を重ねる方

